ポケットモンスター　ユウキのストーリー　カントー編

S・S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　ユウキのストーリー　カントー編

【Ｎコード】
Ｎ３３５２Ｚ

【作者名】
Ｓ・Ｓ

【あらすじ】
この世界にはポケットモンスターと呼ばれるいきものが
山に、森に、海に、空に、町にいたるところに生息している。
その数は１００、２００、３００、４００、５００、６００いや、
それ以上かもしれない
そして今ここに少年ユウキとポケモンとのキズナのストーリーが始まる

今日から僕は・・・（前書き）

今、少年ユウキの物語が始まる。

今日から僕は・・・

とある少年の部屋にまぶしい朝日が差し込み
寝ている少年の顔を照らす。

?「・・・う～ん・・・朝か・・・・!!?、そうだ、今日は!」

～?視点～

ガバッ、

僕は今日が僕にとって特別な日であることを思い出し
ベットから飛び起き着替えてリビングへ向かった。

～リビング～

?「おはよう!母さん!」

母「おはよう、ふふ寝ぐせ治さないと今日の卒業式でわらわれるわよ」

ここで僕の自己紹介をさせてもらうよ。

僕の名前はユウキ
歳は１１歳
首に巻いた赤いスカーフがトレードマークのマサラトレーナーズスクールの
第３８期生で今日はその卒業式なんだ午後にオーキド博士にポケモンをもらって
旅に出るんだ！

・・・でもできればあいつも一緒に連れて行きたいな・・・

母「ほら、はやく朝ごはん食べて寝ぐせ直しなさいよ。」

ユウキ「は～い」

そして僕は朝ごはんを食べてしたくして、家を出た。

～通学路～

僕が通学路を少し歩くと僕の幼馴染のライトとアキがいたので声をかける

ユウキ「お～い、アキ～、ライト～！！」
僕が手を振りながら呼ぶと二人は振り向き
ライト「よぉ、ユウキ！！」
アキ「おはよ、ユウキ！」
二人とも振り向いて挨拶した。

そして、３にんで談笑しながら登校していると後ろから
トラブルメーカーの声がした。
？「おい！！、ユウキ待ちやがれおれのライバル！！」
僕が振り向くとそこには赤髪がトレードマークのリュウがいた。
リュウは僕たちの中で唯一自分でタマゴからかえしたタツベイを持っている
僕たちの同級生でスクールの授業のレンタルポケモンでのバトル実習では
僕との戦積が５０勝５０敗で何かと張り合っていた

リュウ「おい！ユウキ！卒業式が終わったら先生に頼んで旅出る前に
レンタルポケモンバトルしようぜ！！」
リュウが挑戦状をたたきつけてきたので僕は迷わず、

ユウキ「ああ、望むところだよ！」

僕は挑戦をうけた。

アキ「いいの？ユウキ？午後からオーキド博士の研究所でポケモンをもらう約束してるんだよ。」

ユウキ「平気、平気♪旅立ち前のあいつと一緒に戦うラストバトルだ。」

ライト「あいつって・・・ああ、お前のスクールでのパートナーか。」

ライトが分かったという表情をした。

リュウ「よし、そんじゃあ放課後俺のタツベイとおまえのあいつ最終決戦だぜ！」

ユウキ「負けないよ！」

こうして放課後僕たちのバトルが約束されたのだった。

アキ「ハアァ・・・しょうがないか」

ユウキ「！／／／／／」

アキもため息をついて了解してくれた

そのため息をついた顔にすこし僕は見ほれてしまった

～放課後～

僕たちは今スクール裏のバトルフィールドで先生立会いの下バトルを始めようとしていた、
ちなみに余談なんだけど先生は最初は渋っていたけど校長先生が「卒業式ぐらいいいじゃないか」といってくれて許可されたんだ。
まったく校長先生さまさまだね。
その校長先生は今観客せきでアキたちと観戦していた

そして、僕と反対サイドにいるリュウが叫ぶ。

リュウ「いくぜ！ユウキ！、タツベイ、スタンドアップだ！！」

タツベイ『タベーーー！！』

リュウは、腰につけていたモンスターボールを投げタツベイを出した

そして、でてきたタツベイは雄たけびを挙げた。

よーし僕も・・・頼むよ君とのラストバトルだ！

そして僕もボールを手に取りあいつをだした

ユウキ「頼んだよ！！、ナックラー！！」

ナックラー『クラー！』

ボールからナックラーが元気よく飛び出した。

リュウ「いくぜ、タツベイ！」

ユウキ「頼むよ、ナックラー！」

「「バトルスタート！！」」

いま僕とナックラーの最後のバトルが始まった。

今日から僕は・・・（後書き）

・・・と、言うわけでポケモンの小説を書き始めました。

ロックマンのよりは更新遅い思いますがどうぞ温かい目で見てください。

では、次回「タツベイＶＳナックラー」お楽しみに

タツベイVSナックラー！（前書き）

初バトルです。

では・・・スタート！！

タツベイVSナックラー！

リュウ「先手必勝！、タツベイ〈ずつき〉だ！！」

タツベイ『トベーーー！！』

リュウの指示を受けタツベイがナックラーに突っ込んできた

でも、それをもらうわけにはいかないよ。

ユウキ「ナックラー！、〈すなかけ〉で目くらましだ！」

ナックラー『クラー！』

タツベイ『トッ、トベェッ！』

ナックラーのすなかけが、突っ込んできたタツベイにあたり、

タツベイは狙いを大きく外し、たいせいを崩した。

今だ！

ユウキ「ナックラー〈かみつく〉だ！」

ナックラー『クラー！』

ナックラーは、体制を崩しているタツベイに大口をあけて噛み付いた。

ガブッ、

タツベイ『タベッ、タベエェッ！！』

タツベイはナックラーに噛まれて逃げ出そうとじたばたしていた

ちなみに目には涙が浮かんでいた

そりゃ痛いよね・・・

しかし僕は休めずナックラーに指示を出す。

ユウキ「ナックラー！、タツベイを投げ飛ばせ！」

ナックラー『クーラアア！！』

タツベイ『トベエェェ！！』

タツベイは、ナックラーに投げ飛ばされた。

ユウキ「今だ、〈めざめるパワー〉！」

リュウ「させるか、タツベイ〈ひのこ〉で迎え撃て！」

ナックラー『クラー！』

ナックラーの周りに緑色のエネルギー体が出現し、宙をまうタツベイに放たれた。

タツベイ『トベー！！』

そして、リュウのタツベイは口からひのこを放った。

そして、2体の攻撃がぶつかった。

しかしこちらの〈めざめるパワー〉が貫かれてひのこがナックラーを襲った。

！、そうか、ナックラーのめざめるパワーのタイプはくさ、だからほのおの〈ひのこ〉に負けたんだ！

ナックラー『クラァァッ！！』

僕がそんなことを考えてるとナックラーにひのこが直撃していた。

そして、ナックラーがうずくまる。

リュウ「いまだぜ、〈ずつき〉だ！」

タツベイが、うずくまっているナックラーに突撃してきた。

まずい！！

ユウキ「よけろ！、ナックラー！」

僕は、叫ぶがナックラーはよけきれず喰らってしまった。

ナックラー『クラーーーッ！！』

ナックラーは、おおきく吹っ飛ばされた。

よろよろと立ち上がるがダメージは大きいようだ。

リュウ「どうだ！、ユウキ降参か？」

リュウが、叫ぶがそのとき僕は勝つ方法を思いついた！

ユウキ「まさか、いくよ！ナックラー！」

僕が呼びかけるとナックラーもこたえて、

ナックラー『クラー！』

と雄たけびを上げた。

ユウキ「ナックラー〈でんこうせっか〉！」

ナックラーは、すさまじいスピードでタツベイとの距離をつめる。

リュウ「なにっ！？」

タツベイ『トベッ！？』

タツベイがみがまえるけどもう遅いよ！

ユウキ「ナックラー〈じたばた〉だ！」

ナックラーは、じたばたしてタツベイを攻撃する

じたばたは、ピンチの時ほど威力が大きいんだ

そして、今使った〈じたばた〉威力はとても大きくて、タツベイは吹っ飛ばされた。

リュウ「！？ッ、タツベイ！！」

タツベイは、身をおこすがもう遅いさ。

ユウキ「ナックラー、とどめの〈おんがえし〉だ！」

ナックラー『クラー！！！』

ナックラーがこんしんの力で、おんがえしを使った。

タツベイ『タンベェェェェェェェーーーーーー！！』

そして、直撃したタツベイは、目をまわしていた。

リュウ「タツベイ・・・」

リュウは落胆しながら、タツベイをボールに戻した。

ユウキ「やったよ！、ナックラー！」

ナックラー『クラー♪』

ナックラーは僕に飛びついてきた、

そして二人でじゃれあっているとリュウが近づいてきて言う

リュウ「・・・負けたぜ、でも次は負けねーからな！」

リュウは、僕に向かって力強く宣言した。

そして、僕も強く、

ユウキ「僕だって負けるつもりはないよ！」

リュウ「ふっ、それじゃあ俺は旅立ちの準備があるから・・・またな」

ユウキ「うん、じゃあね」

そして、リュウは、ライト達に挨拶してスクールを出て行った。

ライト「リュウの奴いっちまったな。」

アキ「そうだね・・・」

ユウキ「それに、ナックラーと一緒にバトルするのも最後か・・・」

ナックラー『クラー・・・』

僕らが感傷にひたっていると先生が、

先生「おい、ユウキそのナックラーさ、お前がつれていってやってくれないか？」

「「「えええええぇぇぇ！？」」」

ユウキ「いいんですか！？」

先生「おう！」

アキ「でも、どうしてですか！？」

先生「いや、そのナックラーがお前になつきすぎちまってなどうも引き離すのはなごり惜しくてなあ（苦笑）」

と先生が苦笑をうかべながらいってくれた。

そして、その言葉をきいて僕はとても嬉しくなった。

ユウキ「ありがとうございます！！」

ライト「よかったな、ユウキ！」

アキ「ナックラーもよかったわね。」

ナックラー「クラー♪」

ナックラーも嬉しそうに鳴き声を上げた。

がさっ、がさっ

「「「「「「？？」」」」」」

近くの茂みが揺れた

校長「なんじゃ？」

ユウキ「ポケモン？」

僕たちが近づいた瞬間茂みからなにかが飛び出した。

バリバリバリッ、

ライト「ぎゃあ！！」

ライトの悲鳴を聞いて振り返るとそこには

ねずみポケモンのピカチュウがいた。

そして、アキと向かいあっていた。

アキ「わたしと勝負したいの？」

アキが尋ねるとピカチュウは、こくりとうなずいた。

アキ「先生ポケモン貸してください！、わたしこの子をゲットします。」

タツベイVSナックラー！（後書き）

と、いうわけで次回はピカチュウをゲットする話です。

アキ「よ～し、ピカチュウ絶対にゲットするんだから！」

ユウキ「頑張ってね、アキ。」

アキ「うん、まけせてよ。それじゃあ次回予告いくよ。

次回、「わたしのパートナー！！」みんなよろしくね」

それじゃあ、次回もお楽しみにー！

わたしのパートナー！！（前書き）

先生にポケモンを借りたアキは
ピカチュウとのバトルを始める

わたしのパートナー！！

～アキ視点～

わたしは今先生からガーディを借りて

ピカチュウをゲットするためにバトルフィールドにいるの、

ピカチュウもほほに電気をためて準備万端って感じかな？

でも、わたしは初めてのゲットだから正直どきどきなんだよねアハハ、

そして、わたしはボールを投げた。

アキ「ガーディ！、よろしくね！！」

ガーディ『ワオーン！！』

ボールからこいぬポケモンのガーディが飛び出してきた、
みたところ相性は五分五分ね。

ピカチュウ『ピーカチュウッ！』
ピカチュウが戦闘体制に入ったわ。

アキ「ガーディ！、いくよ！」

ガーディ『ガルルッ、』

アキ「ガーディ〈こうそくいどう〉から〈ほのおのきば〉！！」

ガーディ『ガウッ、ガウッ、』

ガーディは、こうそくいどうでピカチュウに近づいてそして、

アキ「いっけー！」

ほのおをまとったキバでピカチュウに噛み付こうとした瞬間

シュウンッ、

え？ピカチュウが消えちゃった、ガーディは標的が消えちゃったから焦ってる

え～と、こういうときは・・・

バリバリバリッ、

ガーディ『ワオーン！！』

アキ「ガーディ！！」

突然、ガーディに電撃が流れて感電しちゃった・・・

でも、ピカチュウはどこにもいないし・・・

あ、そうだ！あの技を使えば！

アキ「ガーディ、〈かぎわける〉！」

ガーディは、あたりを探るように鼻をうごかして・・・止まった

アキ「見つかったんだね！ガーディ！よーし、そこに〈ひのこ〉！」

そうしたらガーディは高くジャンプして自分の足元をひのこであぶった。

なにしてるんだろうって思ったけどその答えはすぐにわかった

ピカチュウ『ピーーカァーーー！！』

ピカチュウが地面からロケットみたいにぴょーんって飛び出してきたの

なるほど、

あのピカチュウ、〈かげぶんしん〉で自分のぶんしんをつくって

それから自分は〈あなをほる〉で地面の中にかくれていて

地下からガーディに電撃をあびせたんだ。

それでガーディは地面を熱してピカチュウを地面から追い出したんだ

よーし、

アキ「ガーディ！一気に決めるからね！〈かえんぐるま〉！」

ガーディ『アオーン！』

ガーディはほのおをまとって焼けどした尻尾を冷ましてるピカチュウに突っ込んでいった

ピカチュウ『ピ、ピカ！？』

ガーディ『アオーン！！！！！』

ドカーン

ピカチュウ『ピカピーーー！！！！』

ピカチュウはかえんぐるまをもろに喰らってくらくらの状態、

よーし、今だ！

アキ「いっけーモンスターボール！」

わたしはくらくらのピカチュウにモンスターボールを投げた

そしてピカチュウはボールに吸い込まれる

ウィンッ、

ウィンッ、

ウィンッ、

・・・カチッ☆

アキ「やったーーーー！！」

わたしはガーディに駆け寄ったそして

アキ「ありがとね、ガーディ♪」

ガーディ『クゥ〜ン』

わたしはガーディを優しくなでてボールに戻した。

さて、

わたしはピカチュウのボールを手に取る。

アキ「ピカチュウ、ＧＥＴ！！」

そして、ボールを空高く突き上げた。

先生「おお、やったなあ。」

ユウキ「おめでとう、アキ」

ライト「おまえ、やるなあ、」

校長「ナイスなゲットじゃったぞ」

みんなが拍手しながら声をかけてくれた

アキ「それじゃあ、先生この子はお返しします。」

先生「おう、よく頑張ったなガーディ」

わたしは先生にかりていたガーディを返した

そして、

アキ「でてきて!、ピカチュウ!」

ピカチュウ『ピっカァ!!』

ピカチュウを出した

アキ「これからよろしくね」

ピカチュウ『ピカチュー♪』

ピカチュウは元気よく答えてくれた

ライト「よし、それじゃあ全員いったん家に帰って旅の準備ができたらオーキド研究所に集合な」

ユウキ「りょうかい」

ナックラー『クラー♪』

先生「それじゃあ、お前ら達者でな！」

校長「たまにはここに顔を出すといいわい」

アキ「いままでお世話になりました」

ライト「そんじゃ、いくか！」

わたしのパートナー！！（後書き）

うーむ・・・こんかいもバトルが短い・・・

さて、それはさておき次回は、「旅立ち」

そして、彼らが最初にもらうポケモンとは！？

旅立ち！！

僕は、ライト達といったん別れて旅の準備と母さんにお別れを言うため、
自分の家に帰ってきた
そして今玄関で母さんと話していた・・・

母さん「ユウキいい？、ポケモントレーナーになるんだったら世界一を取りなさい、
途中で投げ出して帰ってきたら家に入れないからね！、わかった？」

母さんは僕の目を見て強く聞いてきた、・・・そんなの決まってるじゃないか。

ユウキ「うん！、もちろんだよ、ナックラーと一緒に世界一のポケモントレーナーになって見せるよ！！」

ナックラー『クラー！！』

僕とナックラーは力強く答えた

母さん「それじゃあ、いってらっしゃい」

ユウキ「いってきまーす！！」

そうして、僕とナックラーはオーキド研究所に向かって家をでた。

～オーキド研究所～

オーキド研究所はマサラタウンの郊外の高台にあって

このマサラタウンではスクールを抜いて1番大きな建物って言われている

さら自宅けん研究所っていうんだからすごいよなぁ～

僕がそんなことを考えながら高台の坂を登っていると

オーキド研究所が見えてきた

ライト「おい！！、おせーぞ！ユウキ！」

アキ「はやく来て！」

研究所の玄関にはアキとライトがいた僕が一番遅かったみたいだね・・・

ユウキ「今行くよ！」

そして、僕たちは研究所に入っていった

～研究室～

僕たちは今オーキド博士の助手さんの案内で研究室に通されて、

研究室でオーキド博士と話しているんだけどなんだかオーキド博士

の様子が変なんだ・・・

ユウキ「オーキド博士、どうかしたんですか？」

オーキド「いやぁ、その申し訳ないんじゃが・・・君達に今日渡せるポケモンが1匹しかおらんのじゃ・・・」

「「「えええっ！？」」」

オーキド「いやあ、すまんのぉ実は孫のグリーンが一昨日旅に出てその時ついうっかりゼニガメのボールを渡してしまったんじゃよ、ほんとにすまんのぉ」

オーキド博士が申し訳なさそうに頭をかいて言った、けどそれじゃあ二人しかもらえないじゃないか

ライト「そりゃねーぜ、オーキド博士」

オーキド「それで、一応フシギダネとヒトカゲがのこっとるんじゃが・・・」

アキ「それじゃあ、ユウキとライトでもらいなよ

わたしはピカチュウとしばらくこのマサラタウン周辺で特訓してからジム巡りをするから」

ユウキ「え!?、いいの?アキ?」

ライト「それにお前たしか船でグレン島に渡るんじゃなかったのか?」

アキ「うん、今日ピカチュウをゲットする時ガーディにちょっと頼りすぎちゃったし、

だからもうちょっとトレーナーとしての実力を上げたいの」

オーキド「ふむ、ならばライト、ユウキ、この二匹を受け取りなさい」

そういってオーキド博士は、僕にヒトカゲが、ライトにフシギダネ

が入ったボールを渡した

ありがとう、アキそしてよろしくね、ヒトカゲ

オーキド「そうじゃ！、グリーンにも渡したんじゃがこのポケモン図鑑を渡しておくぞ」

そうして僕たちはポケモン図鑑をもらった

ライト「オーキド博士、これって？」

オーキド「うむ、これはポケモン図鑑といって

ポケモンと出会うとそのポケモンのデータを瞬時に読み取り自動でページが増えていくという超ハイテクマシンなのじゃ！」

僕達はその図鑑を起動させた

《キドウカンリョウ、トウロクシャ、ユウキ（アキ）（ライト）・・・ショウニンカンリョウ》

ピコーン・・・ピコーン

ライト「おっ、起動したみたいだな」

オーキド「君達のたびには多くの危険が待っているじゃろう、
しかしそのぶん楽しいことも待っているじゃろう

・・・頑張るのじゃぞ」

「「「はい！！」」」

そして、僕たちはオーキド研究所を後にし、

僕は、トキワシティへジム巡りへ

アキは、マサラタウン周辺でトレーナー修行へ

ライトは、船でクチバシティにいきそこからジム巡りへ

僕たちはそれぞれ今年のポケモンリーグに出場するために歩みだした・・・

旅立ち！！（後書き）

なんとなく最後の一行が最終回っぽくなりましたがまだまだ続きますよ

というわけで次回は、「1番道路の強者」

お楽しみに！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3352z/

ポケットモンスター　ユウキのストーリー　カントー編

2011年12月31日01時49分発行